

伊豆の海や 沖の小島に 波の寄る見ゆ

私は毎年、年始の箱根駅伝をテレビで見て、懸命に走っている選手一人ひとりを応援しています。抜いたり抜かれたり、また、抜き返したり…と母校の名誉をかけて様々なドラマが毎年見られます。“〇〇大学が優勝”や“〇〇大学がシード権を得た”などと報道をされますが、私は選手一人ひとりやその選手を支えるスタッフの思いを知ることによって自分自身の考えの甘さに気づかされることが多いです。今年は給水所で給水ランナーと選手が”乾杯”をするというシーンがありました。選手として選ばれるのは部員の一部ですがともに苦しい練習を乗り越えた選手同士だからこそ、本人たちにしか分からない思いやドラマがあったことと思います。

「箱根路を わが超え来れば 伊豆の海や 沖の小島に 波の寄る見ゆ」これは鎌倉幕府3代将軍 源実朝の句です。箱根の山は天下の剣とよばれ、東海道の難所です。たとえ将軍といってもその山を越えることは大変だったことでしょう。その山を越えた時に目に入った伊豆の海や小島に寄せる白波がとても美しく目に飛び込んできてこの句を詠んだことでしょう。苦しい思いをし、その難関を乗り越えた人にしか分からない感動があるのだと思います。”箱根駅伝”は駅伝部の学生にとってあこがれであり、目標であるでしょう。参加に向けて全国の大学が厳しい練習を行い、予選を勝ち抜きます。有名大学となれば出場資格を得たとしても自分が選手で出場できるとは限りません。今回も4年生となって初めて最後の1回切りの駅伝として出場した選手、4年生で選手に選ばれず、給水担当として選手を支えた選手、選手として出場したものの自分の実力が出し切れず、悔しい結果となった選手もいました。私は箱根駅伝に出た大学や選手だけでなく、出られなかった大学や選手・スタッフをも含めて駅伝に挑戦したすべての学生に大きな賛嘆の拍手を送りたいと思います。厳しい練習を乗り越えたすべての選手が“伊豆の海や 沖の小島に 波の寄る見ゆ”ではないでしょうか。学校においても子どもたちにとって時には、乗り越えるべきことがあるかもしれません。私たち教師や保護者はその時に徹して子どもを励まし、見守ることで子どもたちが沖の小島に波が寄せている光景を見ることができないでしょうか。

「校長先生、これあげる」

校長室の窓をトントンとたたく音が聞こえました。振り返るとそこには女の子が立っていました。窓を開けて「寒いでしょ？」と聞くと、「上着来ているから寒くないよ。それより校長先生、これあげる」と差し出されたのは“桜の花のつぼみ”でした。聞くと枝が風で折れて落ちていてその先に来年咲く花のつぼみがついていたということでした。小さな花のつぼみに気づいた子どもは素敵だなあと思いました。春は少しずつ近づいているのですね。